

江戸東京博物館見学会

大綱目録 藤沢勝一郎(東本町四丁目出身)

今回は、首都圏に住んでいながらなかなか行く機会が無い江戸東京博物館の見学です。当日は、特別展として「よみがえる浮世絵—うるわしき大正新版画—」も催されていましたので、こちらも見学してきました。

九月二十九日(火)、会員十一名は、六階の常設展示室から各自自由に見学を開始しました。

入り口を通ってすぐの日本橋を渡ると江戸ゾーン。江戸城と町割り、寛永の町人地での人の往来している模型やパネルがあり、こんな賑わいだっただのかなという感じが感じられます。近くに「体験しよう大名乗り物」という津山藩主(岡山県)が大名行列時に使った駕籠が置かれ、自由に乗り記念写真も撮れることから、女性や外国人客にもなかなかの人気です。

戦国時代前半の関東地回バネルには、

山内上杉氏は現在の群馬・埼玉県あたりを、扇谷上杉氏は現在の埼玉・神奈川県・東京都あたりを、古川公方足利氏は東京都・千葉・埼玉・栃木県の一部あたりを勢力圏にしていることが示されていて、それに伴う武士団も現在の小田原市、府中市、浦和市あたりに集中し、東京都は閑散としています。字だけの説明よりははつきりと理解できます。

江戸ゾーンの「武士の暮らし」

江戸詰した二十八歳の紀州藩士の万延一年(一八六〇年)の藩邸内勤務日数や一ヶ月の行動記録がありました。彼の勤務日数は、六月が六日、七月は〇日、八月は十三日、九月は十一日、十月は八日、十一月は九日。勤務時間は八時頃から十二時頃です。九月の行動では、藩邸(現

東京都港区元赤坂の迎賓館)から、現在の王子、深川、足立区辺りまでの神社仏閣などを歩いていきますから、今のサラリーマンの勤務形態に比べると実に羨ましい限りと言えそうです。

「越後・新発田藩 江戸中屋敷借家園真景」の景観絵巻があります。一八四四年、現在の東京都中央区銀座八丁目に築造された庭園借家園で、江戸の大名屋敷にはこのように粋を凝らした庭園が多く造られたとことです。

「町人の暮らし」

「江戸店奉公人の経歴—三井越後屋京本店採用者三十五名の動向」として、そのうちの一人、宮田善右衛門のケースが例示されています。

京、伊勢とその周辺上方出身者三十五人が子供・手代(十三、十四歳)として京本店に奉公に上がり、二十一、二十二歳で残ったのが八人、更に三十一、三十二歳の上座(役付)になると六人。勤続年数十五年以内に上座になれない時は、片付けられます。その後、役職が役頭→組頭と上がり、支配(この役職までは住込み)まで残った者は四人、四十一、四十二歳頃です。この間、何回かは江戸店へ向します。

支配の上が通勤支配で、ここから上の役職がいわゆる重役です。通勤支配にな

ると、自分の店を持ちながら、重役として通い勤務することになり、このとき妻帯を許されます。

通勤支配の上の役職は、後見↓名代↓勘定名代↓元方掛名代↓加判名代↓元となりです。

通勤支配になった者は三十五人中、宮田善右衛門一人、この時五十歳。この役職のまま七十二歳で退職、七十三歳で死亡しています。先ほどの紀州藩士と違って、かなり厳しいようです。

庶民の楽しみ「芝居と遊里」では、中村座のセットがあり、昔も今も芸人・タレントの人氣が高いことに変わりがないようです。多くの老若男女が、セットをバックに記念撮影していました。



重さの千両箱を持つてみるのが出来ませぬ。結構重たくて、テレビの時代劇で見るように、捕り方役人を気にしながら暗闇を一人で何箱も担いで走ることなど、とても無理ということが実感できます。ちなみに一箱の重さは、天保小判千両約十一kg（十千両箱（約三kg）全体で約十四キロです。腰を痛めている方は、体験を遠慮した方が良いでしょう。

九月一日の「防災の日」にちなんだ地震関係の展示で「鯨絵」の大きなパネルがありました。

以下に「震災と日本文化」故事来歴からみる鯨と地震（伊藤和明）から引用しました。

「茨城県鹿島町の鹿島神宮境内に『要石』と呼ばれる大石がある。『常陸国誌』によると『大きな魚が日本を取り巻いていて、魚の頭と尾が鹿島の地で重なりあっている。その頭と尾を、鹿島大明神が釘で刺し貫いていて、魚が動けないようにしている。要石は、その釘にあたるものだ』と説明されているが、この大魚が鯨であるという証拠はない。しかし、まずは鯨と考えるのが至当だろうということで、後になって、鹿島大明神が要石で鯨の頭をギュッと押さえつけているという、あの有名な鯨絵が登場するのである。」

「東京ゾーン」には、鹿鳴館、開化の

背景、産業革命、空襲と都民、旗指物などの写真、パネル、実物などが展示されていて、単板のスキー、竹製のストック、初期のアノラックなどは自分の記憶にもあり、とても懐かしく感じました。



よみがえる浮世絵

特別展「よみがえる浮世絵・うるわしき大正新版画」では、米国人ロバート・ムラー氏が一九三二年（昭和七年）から収集した作品四千点の中からの三十点や橋口五葉の「髪梳かす女」、吉田博の「日本アルプス十二題 針木雪渓」などが展示されていました。

「髪梳かす女」では、女の表情から髪の本一本本まで極めて丁寧に彫られ、摺られていて、感心することしきりでした。

新版画とは、江戸時代の浮世絵版画と同様の技法によって制作された、大正から昭和初期に興隆した木版画で、版元、版画家、彫師、摺師らが結集して一枚の作品を創作したものです。

わが国では、江戸時代の一七二二年には書物問屋仲間と地本問屋仲間が成立し、書物問屋は学問的な書物を、地本問屋は草双紙などの戯作や後には錦絵を取り扱っており、版元・作者・絵師・彫師・摺師の分業によって、優れた印刷出版技術を有していたからこそ出来た新版画だと思えました。

なかなか見応えのある博物館で、特に若い方々にこそ行ってほしいと思います。



見学終了後の懇親会 右側藤沢さん